月刊

JMITU

ディスカ

新型コロナ対応版

「過疎地のいらなくなった投票箱」

平和なくらしと、未来の子供たちのために、投票へ行きましょう。

10月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ　グループ分会　2021年発行

No,442

2021年秋闘・年末一時金回答

秋闘・年末一時金回答

私たち労働組合の秋闘・年末一時金に対する会社からの回答がありました。

一時金回答

セガ

係数２．０検討中

１１月にならないと回答できない。

ＳＬＳ

係数１．７５

平均金額

６２７０００円(概算)

その他要求で、「アルバイト・パートタイマーへの慶弔休暇付与ついて」は、

会社「指摘されているポイントはわかるが、雇用区分、役割、等違う。すべてを社員と同じようにとはいかない。同一労働同一賃金、必要なものは１年前に対応済み、会社としてはその考えはない。」

組合「在宅が増えて、交通費や会社の光熱費等減ったのではないか。その分手当てとして支給するべきではないか。」

会社「交通費は確かに浮いているがそれを手当てにあてると言うのは違う。会社としては、あくまで在宅手当が緊急事態一時的に補助費として金額を考えたとき他社と比べて考えても妥当な額ではないか。」

組合「在宅を強制していないか」

会社「コロナで会社に来るなとはいっていない。選択性にしている。緊急事態宣言が解除しても全てが出社しろとは言わない。育児や介護理由があるものは今までどおり行う、ただし在宅での効率が落ちているのは確かなので、ガイドラインを策定し提示していく。」

組合「これだけ在宅勤務が多いと上司としても評価できないのではないか。」

会社「それについてはちゃんとした評価できる。上司とコミュニケーションは取れている。」

組合「３６０度評価について、匿名にするのか出した人が特定されるようなことがあっては、真実など書かない。」

会社「今のところ匿名を考えている。評価制度ではなく３６０度で、フィードバック行い気付きを得る機会、通常評価に加わるわけではない。対象者は役職で、同僚、部下からどういう風に見えているか、セガサミーグループとしてこういう行動が出来ているかなどだ。」

衆議院選挙に行こう！

この総選挙で問われるのは、自公政権をこのまま続けさせるのか、新たな政権に任せるのかは、私達投票者にかかっています。どうせ変わらないと言って、投票に行かなければ、また自公政権が続きます。

森友疑惑など国政私物化疑惑、新型コロナ対策でのマスク配布、医療崩壊を招いて多くの犠牲を出したこと、オリンピック開催強行、アベノミクスで貧富の格差の劇的な拡大、この９年間で、日本の大富豪の資産は６兆円から２４兆円に４倍も膨れ上がりました。その一方で、働く人の実質賃金は年間で２２万円も減りました。

明るい未来の為に投票に行きましょう！

4こま漫画

川﨑よしき

こんな時に地震がありと何も出来ない
あ
ザプーン
ゴゴゴ
ザプーン

コロナも落ちついたし選挙もあるし世の中、良くなるぞ
そんな事ないですよ
Daichi NEWS

そうも言ってられない！

いいや良くなる
ほらほら見ろ
メモに所得倍増と書いてある
パーン

—うちは、大丈夫よそれより
今の地震でお金が落ちてきたのよ

それはあたしらの年金を横取りして
誰かが倍増するって事じゃないんですか？

明日のお昼。美味しいものを食べに行かない？
ああ遅かった
ガク

おまえは夢が無いな
そうですかァどっこいしょッ
アラ

掌編小説

自叙伝

仙洞田一彦

娘から借りたノートパソコンに向かっていると、妻が声を掛けた。

「あら、めずらしい。何をしているの」

そう言った妻は、私の横に立ち画面に目をやった。

「見るな」

私が言うと、

「見るなって言ったって、何も書いてないじゃない」

妻が言った。画面はワードの入力画面で、たしかに一言も入力していない。

雨の多かった夏が終わり、天候不順の九月も終わった。窓の外に秋空が広がっている。居間の片隅の、普段はほとんど使っていない小さな机の上にパソコンを置いていた。あれこれ浮かんではくるものの、どこから、どう書いたらいいのか決まらない。

昼食が終わり、妻は茶を飲みながら、テレビでいつもの昼のワイドショーを見ていた。襖はあけっぱなしなので、妻の居る食卓も見える。妻の方からも私の姿が見える。昼食後はいつも、私も妻の向い側に腰掛けてテレビを見ていた。今日は、食後すぐに立ち上がり、湯呑を持って、パソコンに向かった。

「もう、そこに掛けてから一時間ぐらい経っているんじゃない」

「いいから、いま考えているんだから」

「考えるなんて、久し振りだから出てこないんでしょう」

「馬鹿にするな。いつも考えていないみたいじゃないか」

私は言ったが、言われたことは外れてはいない。定年退職して十五年以上経つが、最近は惰性で生きているような感じがする日々だ。退職直後はあれもやりたい、これもやりたいといろいろあったが、老いのせいかその欲もなくなった。

妻に説明しないと、いつまでも横に立っていられそうなので話した。

「自叙伝でも書こうかなと思ってね」

口に出してみると、なんとなく照れ臭かったが、続けた。

「七十半ばを過ぎた。まだまだ記憶が確かなうちに書き残して置こうと思ってな」

「へぇ、書くことあるの」

妻は最初からバカにしている。

「書くことは山ほどある」

「へえ。誰が読むの」

「そんなにびっくりしなくてもいいじゃないか。書いてなければ読もうと思っても読めない。書いてあれば、だれかが読むだろう」

「まあね」

妻はそう言うと食卓のある部屋の方へ行こうとして、すぐに立ち止まり振り向いて言った。

「私が一番に読んであげる」

「うう」

思わず言葉が濁った。妻に真っ先に読んでほしいとは思うが、である。妻が読むとなると筆が鈍るような気もする。名もなきものの自叙伝。しか

も何を言いたいのかわからない鈍い筆先。そんな本は資源ごみにしかならない。鋭い筆先でなければ価値がない。読み進めるにしたがって唸らせるような、読むのが止められないようなものにしなければならない。

「あなたの自叙伝なら、私も出て来るんでしょ」

「まあね。一般的に自叙伝というのは、本人はもちろんだけど妻、親、子供の登場は欠かせないだろうな。私がどんな風に生きてきたか書くわけだから。それに、私の人生に影響を与えた人は、良くも悪くも外せない」

「良くも、悪くも、ねえ」

言いながら妻は、食卓の方に向いていた足をこちら向きに変えた。私はまずいことを言ったかなと思った。やはり、妻は言った。

「良い影響を与えた人って誰。悪い影響を与えた人って誰」

「いや、それは、言葉の綾で、良くもと言ったら、悪くもと続くのが普通でしょう。書きながらよく考えてみなければ分からない」

「私も、自叙伝書いてみようかしら。面白いわね、きっと。結婚するまでは、それぞれ違っていたけど、結婚してからは一緒だったでしょう。それでいながら、仕上がったものがどうなるか。読み比べてみたら面白いでしょう」

「面白いかも知れないね」

私はそう答えたものの、自叙伝を書く意欲が急速に萎えて行くのを感じていた。妻はそういう私の変化を感じてかどうか分からないが、食卓のある部屋に戻った。

私もパソコンをそのままにして、湯呑を持って行き、食卓のいつもの席、妻の向かい側に腰掛けた。つけっぱなしのテレビで、物忘れに効く薬の宣伝をしていた。人の名前が出てこなくなったが、この薬を飲めば、そういう事が少なくなるんだろうかといつも思った。思ってはいたが試す気にはならなかった。

先に腰掛けていた妻は、私の方を向いて言った。

「あら、執筆の邪魔をしてしまったかしら」

「いや、ちょっと一休み」

言ってから私は、冷えた茶を一口飲んだ。湯呑を食卓の上に置いた。置くのを待っていたように、ちょっと含み笑いをして妻は言った。

「あなた、五年前も言ってた。覚えてる」

「え」

「自叙伝。あの時は数えで七十、古希だからと言っていた。今度は何なの」

言われてみれば、そんなこともあったかも知れないと思ったが、記憶に残っていなかった。

「七十五歳は節目といえば節目といえるかも知れないけど」

「う、うん」

本当を言えば最近、たまたま両親と同世代の人の自叙伝を読んだからだった。一九四五年、昭和の二十年八月十五日の終戦を挟んで、戦争の時代、戦後の時代を生き抜いてきた人だ。何というか、過酷な人生に圧倒されたとでもい

うべきか。テレビニュースで、現在の戦争が報道されることがある。爆弾や砲撃を受けたがれきの前で表情を失って立ち尽くす人々。銃を持つ人々とそうでない人々が行き交う街の風景。主張、立場、経歴によって人前に顔を出せない人も数多くいる。常に緊迫、緊張して生きている人、そんな中で生きてきた人のことだ。

うっかり言ったら「あなたの人生も、波乱万丈だったわねえ」と妻からからかわれてしまいそうだ。きっとそう言うに違いない。

そういう人々と比較できないが、私は私なりの人生を振り返って書いて見たい。そう思ったのだ。しかし高校を卒業し、転職を何回かして、結婚もでき、子供もできた。会社勤めでは、出世もしなかったが、クビにもならなかった。熟練などとは程遠い仕事をしてきた。日記もつけていない。資料になりそうなものは断捨離とかでみんな捨てて何もない。でも、自分なりに信念を持って生きてきたつもりだった。

話を妻の方に振った。

「あの時もお前、自叙伝を書くと言っていなかったか。まだ書き上げてないのか」

長く一緒にいると会話も型にはまって、同じ言葉でやり取りをする。私自身に記憶はなかったが、当時、妻も同じことを言っているかもしれないと思って、ヤマを掛けて聞いてみた。

「言ったかもしれないわね。忘れた。次にあなたが自叙伝というのは喜寿の時かしらね」

妻は視線をテレビに向けたまま言った。

「コロナにやられなければな」

私は言った。つい口に出たので思い出した。いつ襲われるか分からないコロナ危機も自叙伝を書く動機に含まれていた。そうだ、また、思い出した。定年直後、私の人生を全く否定するような言葉を吐いた奴がいたのを思い出した。その後何度か顔を合わせているが、本人は気付いていない。言った側は忘れていても、言われた側は覚えている。そういう奴だからあんな言葉を吐いたんだ。あの時はそれを思い出し、パソコンにではなく原稿用紙にたった一行「人それぞれにかけがえのない人生」と書いただけで終わった。

「あなたが自叙伝と言うのは喜寿の時かしらねえ」

妻がまた言った。

「同じこと言うな」

「え、言ったっけ」

妻が答えた。自叙伝など、ものにならないことは、はじめから見抜かれている。

テレビに視線を向けた。また記憶の薬の宣伝をやっていた。